



通信

No.61

2017年 夏号

発行：子育てサポートくるみ

住所：羽曳野市壺井 508-1 TEL：072-957-3282

FAX：072-958-4089 HP：<http://kosodate-kurumi.com>

遊びは宝

子どもたちに自然豊かな環境と思いきり遊びまわれる広い場所を求め、くるみ共同保育園が壺井の地に移転し27年となります。

壺井地域は交通量も少なく、子どもたちが安心して散歩に出かけ、近隣の野山に探索することができる環境が残っています。天気の良い日は戸外で0歳から学童まで本当に良く遊びます。子どもは遊んで成長していきます。その遊びが豊かで思う存分保障され、「あー楽しかった。おもしろかった。」と子どもが思える体験が何より大事だと考えています。そのために園庭は広く、走り回ったり、たくさん植えてある木の陰で休憩したり、土山・水場でお鍋やスコップを使って、こねたり掘ったりままごとをしたり、それぞれの年齢の発達に合った遊びが自由にできる環境を整えています。

そんな子どもたちが遊んでいる姿を、腹ばいの赤ちゃんからでも見えるように園舎の戸はガラス張りにし、見て、いっぱい刺激を受け、興味を持ち、「自ら」行きたいという意欲を引き出せるようにしています。この「自ら」動く意欲をしっかりと育てることが、その子の芯を育て、生きる原動力となると思うからです。

そうして、自発的に、満足するまで遊びきると、生活も意欲的に変わっていきます。毎日、よく食べて、コテンと寝るようになり、生き生きと元気に楽しみをもって、生活の主人公として過ごす姿となります。この意欲と主体性を乳幼児期にしっかりと育てていくことを大事にする保育を展開しています。春は草花や虫探しの散歩や土山や泥んこをし、この夏はたっぷりと水遊びを満喫した子どもたちは、本当にたくましくひと皮むけていきます。全身で水に慣れ、遊びつくすことは、秋に向かって自分自身を肥えさせるエネルギーとなっていくように思います。くるみが学び続けている齊藤公子氏のさくら・さくらんぼ保育の中で、子どもには太陽と土と水が欠くことのできないものだとしています。くるみの夏も毎日水三昧です。たっぷり水遊びを楽しんだ子どもたちは、秋にどんな実りの姿を見せてくれるか楽しみです。



【土山で遊ぶ子どもたち】

園長 山田 房江

生きる意欲を育てる給食

「食べる意欲は生きる意欲」これはとても大切なことです。くるみでは、乳児期から「食べる」ことを大事にしています。食材を豊かに経験し、「食べる」ことの楽しさや「食べる」力を養い、心と体の発達にも気をつけています。

調理で大事にしていることは、

- 薄味で、だしのうま味を生かした調理法
調味料は塩、醤油、味噌、酢が基本
- 野菜中心の和食
できるだけ国産で安心、安全なもの、旬の食材を使う
- 基本の栄養を満らし、見た目もおいしい給食
彩り、栄養バランス
- しっかり噛む食材を意識的に取り入れる

これらを基本に献立を立て、給食を作っています。



【くるみの給食】

長年の実践で手ごたえを感じているのは、アレルギー体質の子も、離乳食からゆっくり丁寧に進めることで改善につながることです。必ず医療機関で診断してもらい、園と家庭とで連携しています。年齢が大きくなるごとに、食べられるようになり、皮膚の状態も改善していきます。そして乳児期に焦らずゆっくり進めていくものの一つに、油の使用があります。1歳を過ぎると調理法として炒め煮を提供し始めます。揚げ物は内臓への負担を考慮し、3歳から給食に出すようにしています。

保育園で1日のほとんどを過ごす子ども達が、元気で楽しく過ごせるように、おかわりもたっぷり作っています。また、子ども達の体調を見ながら、献立や調理法を考慮しています。おいしくてお腹いっぱいになり、基本の栄養がしっかり取れて、「体を作り心を育む給食作り」を目指しています。

くるみの保育の特徴は年長の合宿保育です。姉妹園のみんなで取り組む9月と3月の合宿があります。その他にも、6月はくるみ主催の合宿、10月・12月はもみの木保育園へ出かけての合宿、2月には山中ふたばスキー合宿があります。人数は合宿ごとに違いますが、共通しているのが、3食をそれぞれの保育園で作っていることです。その時々季節に合わせた旬の食材を使い、各地域の郷土料理が取り入れられています。また、合宿の時には、参加園の保護者の方々がお手伝いして下さっています。普段は見られない子ども達の様子が見られ、保護者同士の交流ができて良かった、多くの大人が子ども達に関わってくれていることがわかったなどの感想が聞かれます。長ければ4泊5日の合宿の間、規則正しい生活と体にやさしい食事を食べ、仲間と寝食ともにすることで、子どもはもちろんのこと大人も学び得るものが多く、また元気になっていくのを実感しています。

くるみの給食のことをもっと知りたい、この献立の作り方を教えてほしいなどがあれば、給食室へ声をかけて下さい。

職員 細川 千夏

保育士・保護者の声

○ くるみで過ごした6年をふりかえって (安藤 和)

1年目はまだ目の前に竹やぶがある頃の0歳児室で、紅露さんと一緒にすすめさん(0歳クラス)の担任になりました。慣れるのに必死でした。子どもを抱き上げれば「その子は今だっこしなくていい!」と言われ、ホールに出れば宇山さんに「保育をしようと思わないで!」と言われ、私は何をしにきたんだろうと思ったこともあります。今思えば、歩く力のある子を必要以上にだっこしてしまったり、余計な手出しをしたりと過保護過干渉だったのだと思います。

楽しかったことは、子どもの成長をそばで一緒に味わえたことです。よく聞く様な言葉だけど本当にそれが楽しかったです。0歳児でハイハイ板のすべり台からはじめてしゅーっとすべれた瞬間など、なにかひとつ「あ、できた!これたのしい!」って思うとき子どもの目がきらっと光って大人の方を見る。そこで目が合って共感できる。それが子ども同士でも目を合わせてきゃっきゃと遊ぶようになっていくのを間近で見られて、0歳からの保育ってすごいなあと思うことが何度もありました。

全部のクラスを持ちあがりしたのではなく、3年目の前半は発達支援のクラス、後半は0歳児、と体制がいろいろと変わる年でした。

4・5年目は3・4歳児。ひたすら集団あそびをしていた気がします。はじめは「くだもの島」でタッチされたら「いやや!」と泣き出して、すぐあそびが終わってしまいましたが、ルールがわかってそれがたのしいとわかると何回も繰り返していました。

日々の生活や散歩のなかでは子どもが話すちょっとした会話がおもしろくて、メモを持ち歩きたいような気分でした。保育中にそんな余裕はありませんでしたが。

・「きょうのおつきさま、おいしそう」「りんごみたいやな」「今日のおやつのおもちみたい!」「なんか、おちてきそうやな」「おちてけーへんわ!」「なんでそんなんわかるん!」

・「なあ、あの草たべれるかなー」「きのうたべたら、なんかニガかったで。こっこの実はちょっとシャシャンボのくさったあじ」

・「あっちから風くるなあ。おひさまから風ふいてくるみたいやな」

・「なに食べてるん?」「え?ごぼう。(本当は木の枝)」

大人になったら、できない会話だなあと感心していました。

6年目はそんな14人との年長生活でした。もちろん保育で悩むこともありました。多くの場面で職員や親のパワーに助けられました。特に合宿では、早寝早起き・子ども中心の生活がこんなにも気持ちいいのだと目の当たりにしました。それを支える関西の職員・親団体の力があってこそ、この合宿が成り立っているんですね。我が園だけじゃなく、他の園と交流できる合宿は子どもにとってはもちろんのこと、私にとっても学ばせてもらえる貴重な経験でした。

くるみの職員は、自分のクラスだけじゃなくて、0歳から学童・給食も含め、子どものことを何でも話し合う職員集団です。実は照れ屋な私は口ではあまり言いませんが、私が就職するずっと前からそういう関係を作ってきたくるみのあり方に内心とても感動していました。

くるみを離れ、私は今いろんな国へ旅に出ています。先日ポーランド・オシフィエンチムにある「アウシュヴィッツ＝ビルケナウ ナチス・ドイツの強制絶滅収容所」に行ってきました。ただの過去の悲しい歴史じゃなくて、今の問題と深くかかわっていて、そこで聞いた話ひとつひとつが「保育だけじゃ子どもは守れない。子どもを取り巻く今の社会情勢にも目を向けること。平和でなくちゃ」とこの保育で学んだことにつながっている気がしました。

夏からは地元・愛知でまた保育士として働きだします。ここで経験させていただいたことを糧にこれからも学んでいきたいと思います。



[卒園式で]



[祝う会での食事の様子]

○ 初めての年長 (宇山 瞳)

長女が小学校に通い始めて早2ヶ月です。

4月、小学校入学を心待ちにしている本人そっちのけに母は不安でした。

髪が短いから「男みたい」と言われる、周りのみんなは字が読める、流行りのアニメなんて何も知らない、そんな状態で楽しく学校に行ってくれるのか？

新しい環境に入るにあたって、しっかり、食べて、寝て、遊ぶ、を意識しました。

その積み重ねが気持ちの土台になることを、この6年間で学んだからです。

今、登校時に満面の笑顔で友達のところへ走っていく子供を見て、強くなったなあと思います。

この強さはやっぱり最後の年長の1年、特に7回の合宿で大きく培われたように思います。

最初の合宿では帰ってきての感想は「わからない」(自分の中で消化しきれない)だったところから、3回目の合宿くらいで「母ちゃんのことそんなに好きじゃなくなったわ」(大好きな友達ができたから)に変わり、最後の3月合宿ではすっかりリラックスしている様子が見られました。

専業主婦家庭で育ち「お家大好き」だった自分にとって、保育園に預けること自体、これでいいのかと悩みながらの時期は長かったです。

そんな時に「くるみ行きたいくない」なんて言われようものならすぐ動揺する親でした。

週末にくるみの友達と遊んだり、次女もくるみに入園した頃から、「くるみに行くのが楽しい!!」と思っているのが感じられ、やっぱり良かったなあとホッとしたりしました。

そんなこなしているうちに気付いたらタカ組(年中)になり、あっという間にワシ組(年長)に。

歴代のワシの親が偉大に見えていたので、自分はどうなることやら、とにかく言われたことをこなすしかないかという気持ちでした。

合宿の荷物を入れる巾着作りに始まり、フェルトのペンケースの刺繍、合宿手伝い、毛糸の靴下編みでラストは文集づくり。

ベテランのワシ親さんたちの積極性に圧倒されつつ、なんとかついていく感じでした。

ペンケースの刺繍をする際には私がちょっとしたことでやる気をなくし、途中から父ちゃんが縫うなんてこともありました。

合宿のボストンバッグもどれを買おうか迷っているうちに時間が無くなり、園を經由せずモンベルで買って「モンベル係さんごめんなさい～」と思ったり。

カレンダー販売の目的がどうもじっくりこないまま、でもワシ親だし!とえいやーで飛び込み販売したり。

こんな母でも最後までやれたのはやはり周りの親がいてくれたからです。

楽しめばいいんだなと気付かせてもらいました。

最後のお泊りの日、ワシ親の大半の世帯が参加してご飯作り、一番楽しかったです。

自分に出来ることをやればいい、でも、ちょっと無理してでも積極的に参加することで楽しくなってくる、というのがこの1年で学んだことです。

くるみの台所手伝いで園の美味しいご飯を食べたとき、親子リズムで自分もリズムをしたとき、こんな毎日を送ったらそりゃ健康になるわなーと思います。

お迎えに行ったとき、職員さんが「お帰りー」と言ってくれるのが好きで、子供もこんな風に迎えてもらってホッとするんだらうなと思います。
これからもよろしくお願いします。

○親も子も育つ保育園（梶原 望）

くるみに入って10年になります。アンパンマンに囲まれ、テレビも見せて育てていたうちは、「こうしてね」と、今までの食事や生活を変えるように言われることがいっぱいあり、保育士さんは子どものためにと言うけれども、何でやろう？と納得できなかったり、へこんだりすることも多々ありました。

クラス懇談では、集団が苦手なリズムに参加するのも自由気ままだった長男Yの課題を指摘され、いたたまれない気持ちにもなったこともあります。

Yがたかの時に、前園長が「ほんとにYの頭の中は分からん！！」と、「リズムをするからジャンパーを脱いでと言っても“これ上着や”と言い返して脱がなかった」という出来事を笑いながら私に話してくれました。それを聞いて私は、いつも保育士の言うことを聞かないYについて、無意識に「すみません」と謝っていました。

でもよく考えると「頭の中は分からん！」なんて普通の園長は言わないよな～、親やったら言うかもしれないけど・・・と思い、前園長は、Yのことを、「ただの園児としてではなく、親と同じように子どもをみてくれているんだ」「そうか、ここは普通の保育園ではないんだ！」と気づきました。

親と同じよう、もしくはそれ以上に子どものことを考え、最良の環境を用意しようとしてくれる。だから、親に対しては要求されることも多いし、子どもの課題を共有してくれる。

そのことに気付いてからは、私は保育士から何を言われても、いたたまれない気持ちになるどころか、反対に「そうやろ～！！」と素直に共感できるようになり、言われて納得できないことは、分かるまで保育士に聞ける親に変わりました。

保育士の言っていることが理解できるようになると、子どもへの見方も「出来る」「出来ない」ではない見方が出来るようになり、だからこそ“いたたまれない気持ち”というものがなくなったような気がします。

保育士と「子どもの見方を一致させること」が子どもの成長につながることを実感し、くるみの保育士との関係は、今まで私が経験した「先生」「友達」「親戚」等、何の 카테고리にも当てはまりません。言葉にするなら「子どもの見方を一致させ、共に子育てをしていく仲間」なのかな？

本当に、この関係はプライスレス！です。これからもこの、普通の保育園にはないであろう「親も子も育つ保育」が続いていきますように！